

ハイデルベルク信仰問答より

問 61 あなたは、なぜ、自分は信仰によってのみ義とされる、というのですか。

答え それは、私が自分の信仰の価値によって神を喜ばせるからではなく、キリストの償い、義および聖さだけが、神の御前で私の義であり（Iコリント 1:30、2:2）、この義を私はただ信仰による以外には、受けることも私のものにすることもできないからです。

本問答で焦点となっているのは、神の御前における「義」が人の業によってではなく信仰によってもたらされるということです。業（行い）が目に見えるものであるのに対し、信仰は目に見えません。むしろ、信仰は言葉によって表明されるものです。信仰は言葉によって公にされてこそ意味のあるものとなります。このように、可視的な「業」ではなく、不可視的な「言葉」によって信仰は有効になるということが、問いにおいて暗に強調されています。

答えの部分は大きく三つに分けることができます。

①「私が自分の信仰の価値によって神を喜ばせるからではなく」

信仰は言葉で表すものでありながら、信仰告白そのものが神に評価されるということではありません。言葉はその人の心の思いを映し出しますが、そこに何らか「自己義認」「誰かの非難」「自己顕示」といった要素が入り込んでしまうと、それはもはや信仰告白ではありません。信じるとは、己を空しくして主イエスが自分に対してしてくださった恵みを受け取ることだからです。そこに溢れ出てくる言葉は、自らの罪を認め、それをことごとく赦してくださった主への感謝以外にはないでしょう。「信仰とは、救いを受け取る手のようなもの」（朝岡）。こぼれる恵みの雫を両手で受け取っている自分の姿を言葉に表すのです。

②「キリストの償い、義および聖さだけが、神の御前で私の義であり」

神の御前に義とされるためには、神に対する全き服従を示すことがアダム契約によって示されたことでした。しかし、人間にはそれができませんでした。私たちもできませんでした。できたのは主イエスお一人であり、彼は私たちの失敗をご自分のいのちをもって償い、神の御前で完全に義しくあり、聖くあり続けました。死に至るまで「償い」「義」「聖」を全うされたのです。そして、それを罪人に「あなたがそれをやり遂げたことにしよう」と、惜しみなく移譲してくださいました。このように、信じる人は、キリストが貫き通してくださった「義」を自分のものとするのできるのです。

③「この義を私はただ信仰による以外には、受けることも私のものにすることもできない」

人間（特に日本人）が考えそうなことは、「申し訳ない」「ただで受け取るわけにはいかない」という誤った恭謙です。「何かしらの返礼品が必要なのではないか」「これだけのお金を支払わなければならないのではないか」「対価となる善行が求められているのではないか」ということを言い始める。余計なことをするのはやめましょう。恵みに何かを付け加えると、それは恵みではなくなってしまいます。無償で受け取り、感謝の言葉を述べればよいのです。義理堅い日本人にとって、この「恵み」の感覚は、生まれつきの気質とやや開離があるのかもしれません。ですが、こう考えてみてはどうでしょう。私たちの人生にまったく新しい価値観が入り込んできたのですから、そこにある種の違和感を覚えるのは当然なのです。その恵みに自分の心を合わせ、じっくりと味わい、浸かり続けていくとき、私たちはだんだんと楽になっていくはずで、もうがんばらなくてもよいのだ。主イエスがすべてやってくださったのだ。安心して従っていけばよいのだ。このように、肩の力を抜いて身を委ねてみましょう。